

## 等身大の私達

- 若者のコミュニケーションの使い分けと価値観の構築 -

池田理菜<sup>1</sup> 高橋杏奈<sup>1</sup> 天笠邦一<sup>2</sup> 小川克彦<sup>3</sup>

慶應義塾大学 総合政策学部<sup>1</sup> 政策メディア研究科<sup>2</sup> 環境情報学部<sup>3</sup>

### 1. はじめに

テレビなどで社会問題の 1 つとしてメディア利用を取り上げる際に、「現代の若者」という言葉をよく見かける。若者が高校生を指す場合もあれば、大学生を指す場合もある。一方で若者のメディア利用・コミュニケーションを論じた研究は数多くあるが(松田 2000、富田 1998 栗原 2003 など)、大学生や高校生の差異を取り上げているものは少ない。高校生から大学生への環境の変化は、多くの場合で非連続的なものであり、若者の自己形成に大きな影響を及ぼす。高校生と大学生では生活習慣や友人関係の構築方法も違って来る。それなのに「若者」ひとくくりにしてよいのだろうか。若者の社会的成長とメディア利用を考える上では、高校生とその先のライフステージを詳細に比較して、その差異について考えていく必要があると考えられる。

そこで私たちは、悩みの解決の中でお互いが正直に向き合う相談という行為に着目し、高校生・大学生の差異、その比較の中から対人的ネットワークの構築とメディア利用実践の相互関係について調査していく。さらに使い分けの状況の理解から「日本の若者の対人的価値観」を明らかにする。

### 2. 実施調査

#### 2-1 定量調査の概要と結果と考察

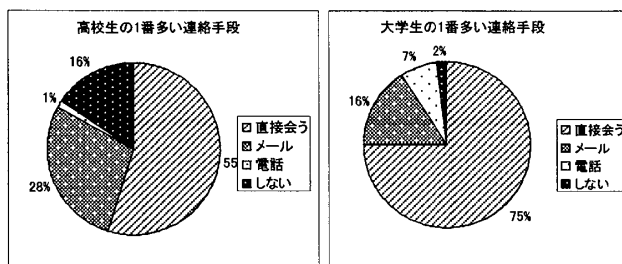


図 1. 高校生の連絡手段

図 2. 大学生の連絡手段

恋人や家族に関する相談をする場合の連絡手段(携帯メール・携帯電話・直接会う・連絡しない)と重要度(大変重要である・やや重要である・あまり重要でない・重要でない)の 2 本の軸を設けたマーク回答式アンケートを作成し、神奈川県内の大学生 108 名、高校生 237 名に実施した。なお、回答欄には、各自のコミュニケーションの状況に対する自由記述枠も設けた。上図 1・2 は、他人に相談をする際の、高校生と大学生の連絡手段を表すものである。

連絡手段による高校生・大学生の差で最も顕著なのは、「連絡しない」という項目である。高校生は約 1/5 を占めるのに対して、大学生にはほぼ回答者がいない。【高橋「連絡しない高校生」情報処理学会 2010 年全国大会予稿 2010】

本論文では、連絡手段と重要度に着目したい。図 1・2 から分かるように、高校生・大学生ともに、対面コミュニケーションを重視する傾向が見られた。自由解答欄からは、「この内容ならば直接会う」や「相手の表情がわかるので誤解が生まれにくい」などの意見が多かった。メールは「文章が残ることが嫌」「細かいニュアンスが伝わりにくい」という回答が目立った。また、予定などの後から確認できるものはメールですが、相談などをメールですると誰かに見られてしまうかもしれないという第三者を気にする回答もあった。電話に関しては、「相手の都合が分からないのでかけにくい」という意見が多かった。

高校生・大学生は学校や部活、バイトなど、普段から自分の生活リズムに入っている人たちとコミュニティを形成しその仲間意識も強い。そのため「報告のために会うのではなく、会ったときに報告する」のだ。アンケートの内容は、いずれも、相談にあたるものだったため、連絡相手にはある程度の親密さが要求された。そこでメールや電話でなければ連絡をとれない距離にいる相手ではなく、同じコミュニティに属し、普段の日常生活の中でも“会える”距離にいる人に相談を行なっていると考えられる。

一方でさらに詳細なデータ分析を行うと高校生と大学生では、人間関係の重要度の差が生じた。この差は「将来の話をするとき」「家族の

The Life-Sized Image of the Adolescents of Japan  
 ~Communication Style and Sense of Value of Young Japanese~  
 1 Rina Ikeda · Anna Takahashi · Keio University  
 2 Kunikazu Amagasa · Keio University  
 3 Katsuhiko Ogawa · Keio University

話をするとき」「学校やバイト先の愚痴をいうとき」の 3 項目に顕著に現れた。

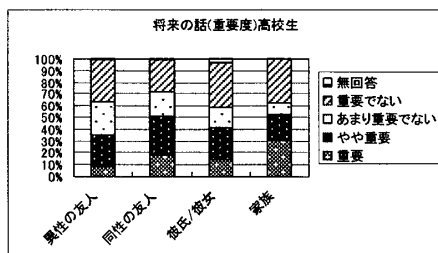


図 3. 将来の話に関する重要度・高校生

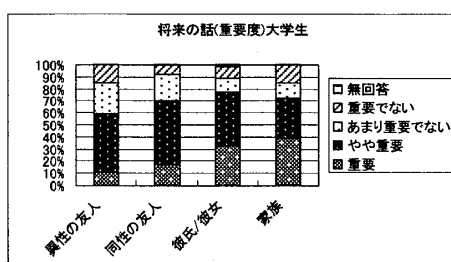


図 4. 将来の話に関する重要度・大学生

図 3・4 の「重要」と「やや重要」を合わせた部分に注目したい。相談相手が「異性の友人」「同性の友人」「彼氏/彼女」によって重要度がは低高低の山型、大学生は低中高の右肩上がりになる傾向が見られる。そこから私たちは、高校生は【同性の友人>彼氏/彼女=異性の友人】に対して、大学生は【彼氏/彼女>同性の友人>異性の友人】という人間関係が成り立っていると仮説をたてた。大学生のサークルと違い、高校生は部活動が女子・男子に分かれている場合が多く、同性の友人と接する時間が長くなるのではないだろうか。また彼氏/彼女の関係をみても、大学生は 1 年以上続くカップルが多く結婚にまで発展するケースもあるが、高校生の場合付き合い始めてから別れるまでのスパンが比較的短いのではないだろうか。以上のことから、高校生・大学生に差異が生まれたのではないかと考えた。

## 2-2 インタビュー調査の概要と結果と考察

この仮説の検証と、そのような価値観が生まれる背景を探索的に理解するために、本研究で高校生・大学生に対する半構造化インタビューを行った。

高校生に対するインタビューから一部抜粋

高橋：へー、彼氏よりも大まかに女の子の方が仲いいんだ

高校生：いつも一緒にいるから。

左記から、共有する時間が重要になる。男女の区分が大学よりも明確な高校では、同性の友人と過ごす時間必然的に長くなる。高校生の全体の 55% が「直接会う」という連絡手段を重要と考えていることから、メールや電話をする精神的近さよりも、対面している物理的近さを大切にしていることが分かる。高校生は対人関係において自分との親密度を測る基準の一つとして「共有する時間の長さ」があることが言える。こうした時間の長さは、コミュニティの同質化と閉鎖的規範の構築を促す。すなわち、異性の恋人に時間を割くことは、同質的で閉鎖的なコミュニティからの離脱を意味し、それは非難の対象ともなりうるのである。

大学生に対するインタビューから一部抜粋

大学生 A：今は家族とつながりがあるから、大切にしないではいけない人で先に異性が来るとってゆー風に私は書いたんです。

大学生 B：異性が 1 番？

大学生 A：異性の恋人がいたならば 1 番かなって思って、同性の友人、異性の友人だとももうんですけど。

一方で大学生は、コミュニティの同質性がゆるくなり、人間関係がより選択的になると、ワンアンドオンリーの存在として、異性の恋人の独自性が高まる。そして総体的にその価値が上昇すると考えられる。

## 4. おわりに

今回の調査で高校生と大学生では、対面コミュニケーションを重視しているが、対人関係の構築方法が異なっていることが分かった。それは生活スタイルからくる、価値観の違いが関係している。だが、メールが使われていないのではない。緊急性を要する内容や予定を調節する内容ではメールの利用率が、全体の 50% を超えるものが多い。意識的に内容ごとに手段を変えているのであることが分かった。

今まで述べられてきたような大人の上目線の若者論ではなく、若者自身による等身大の分析によってこれまでとは価値基盤から異なる新たな若者像が構築される。

## 5. 参考文献

- 富田英典(1998)「若い世代とメディア環境」マスコミュニケーション研究 52
- 栗原正輝(2003)「若者の対人関係における携帯メールの役割」情報処理学会 21(1)
- 松田美佐(2000)「若者携帯の友人関係と携帯電話利用—関係希薄化論から選択的関係論へ—」社会情報学研究 第 4 号